オーディオ実験室収載

STAGE+を楽しむ(173)(HP 収載)
―ブラームスの交響曲第 2 番とモーツァルトの交響曲第 36 番―

１．始めに

前報(172)に引き続き、STAGE+のブラームスの交響曲第 2 番とモーツァルトの交響曲第 36 番の演奏の試聴を実施します。

２．試聴音源

今回はブラームスの交響曲第 2 番とモーツァルトの交響曲第 36 番の演奏を選びました。

クライバーが指揮するブラームスの交響曲第 2 番とモーツァルトの交響曲第 36 番

ウィーンフィル

収録日: 1991 年 10 月 7 日

名匠カルロス・クライバーがウィーンフィルハーモニー管弦楽団を指揮した、ブラームスとモーツァルトの交響曲のライヴ収録です。クライバーは極端にレコーディングを避けたことでも有名で、映像はさらに貴重なものとなります。綿密なリハーサルでも知られるクライバー。アンサンブルの完璧さはもちろん、ウィーンフィルと共に紡ぎ出すその音色は品格があります。また音楽のつくりは重厚でありながらも、旋律の扱いなどはとても自然で心地よく、美しい指揮姿も魅力的です。

演奏:

ウィーンフィルハーモニー管弦楽団

指揮:

カルロス・クライバー

曲目:

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

交響曲第 36 番ハ長調 K. 425《リンツ》

ヨハネス・ブラームス　交響曲第 2 番ニ長調 op. 73

３．試聴の経過

前回に引き続き、これまでに実施してきた対策に加えて、アースアキュライザーの活用(6)で報告しましたようにアースの再構成を実施し、AV ドーナッツも使用しています。

前報(162)では、クライバー指揮によるバイエルン国立管弦楽団によるモーツァルト第 33 番とブラームス第 4 番を聴いています。

今回のモーツァルトの交響曲第 36 番とブラームスの交響曲第 2 番もオーケストラ違いですが、まぎれもなくクライバーのモーツァルトとブラームスです。

1991 年の収録ですので、最近の収録音源に比べると音の精度は落ちますが、ブラームスの交響曲第 2 番などは、クライバーの情熱が発散するような演奏で、ウィーンフィルの能力を十分に引き出しています。

４．まとめ

これまでに実施してきた対策に加えて、アースアキュライザーの活用(6)で報告しま

したようにアースの再構成を実施し、AV ドーナッツも使用した結果、クライバー指揮のウィーンフィルの実力が発揮されている演奏であることが示されました。

以上